研究の概要

１．研究主題

「自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成」
～子供が「わかった・できた」達成感のある授業づくりを通して～

☆研究を通してめざす児童の姿

・課題意識を持ち、主体的に、粘り強く解決しようとする子
・対話を通して自分の考えを広げ深める子

２．主題・副題設定の理由

昨年度は、国語科を中心に他教科・他領域においても主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりを通して、主題に迫ってきた。その中で、以下の点が成果としてみられた。

〇指導事項と児童の実態を基に、つけたい力を精選して単元を組み立てることで、単元での学びが深まった。教師が B 規準を明確に持ち、単元のゴールとなるモデルを作成し児童と共有することで、児童は見通しを持つことができ、単元のゴールに向けて主体的に学習に取り組んでいた。

〇対話的に学ぶ場を意図的に設けたり、友達と話したいという児童の必要感からペアやグループでの話し合いを取り入れたりしたことにより、自分と友達の意見や考え方を比較したり、友達から新たな気づきを得たりして考えを広げている姿が見られた。

〇具体的な視点に沿って学びをふり返ることで、児童は 1 時間や単元の中で自分についた力を確かめることができた。また、教師がふり返りの視点を示すことで、ねらい達成につながったのかを確認したり、ふり返りの内容を基に児童の成長を認めたりして、学習意欲の向上につなげることもできた。

〇図書館司書と協力して各学年に「おすすめの本」を設定したり、単元の初めに図書館司書によるブックトークを取り入れたりすることで、幅広く図書に親しむ姿が見られた。また、生徒指導の三機能を生かした授業づくりに努めることで、安心して学習できる環境をつくることができた。

以上のように、研究を積み重ねてきた成果が見られる一方で、次のような課題が挙がった。

△B 規準として設定した目標が正しかったのか、検証していく必要がある。また、B 規準に達する児童の具体的な姿をどのように評価していくのか、評価場面、評価方法についても今後研究を深めていく必要がある。

△児童が対話を通して考えを深めきれなかったのは、職員間で対話を通して自分の考えを深めている姿のイメージが共有されていなかったためと考えられる。今後、児童のどのような姿が認められれば学びが深まったといえるのか、教師自身が考えを深めている児童の具体的な姿を想定して取り組みを進めていけるようにしたい。また、児童の話し合いのスキルを向上させるために、効果的な方法を共有し共通実践していく。

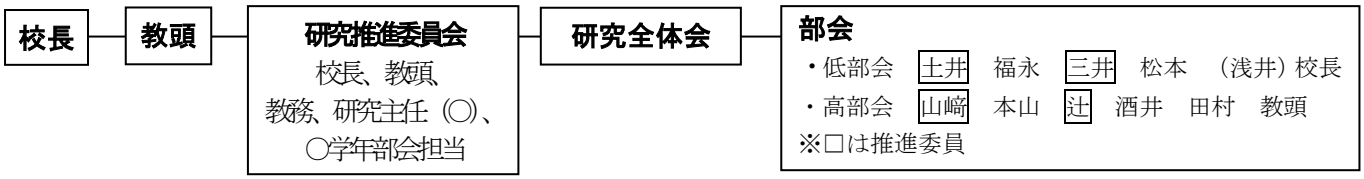
△視点に沿ったふり返りを行うことができたが、ふり返りをするための時間の確保やふり返りの方法に課題が残った。児童がふり返りを行うことで学びを自覚化できるように、単元計画の中でふり返りの場面を計画的に位置づけたり、児童の実態に応じてチェックシートによるふり返りを取り入れたりして改善していきたい。

△書いたり話したりする活動の中で、より表現を広げていけるように語彙を豊かにすることが課題である。児童が対話を通して自分の考えを広げ深めていくためにも、取り組みを共有し日常的な指導の中で取り組んでいきたい。

本校の児童は素直で優しく真面目な児童が多い。しかし、受け身の姿が目立ち、積極性が低いことが課題である。また、児童アンケートでは、「自分にはよいところがある」と感じている児童の割合が低いことも確認された。子ども達が自分に対しより自信を深め、受け身的な姿勢から脱却し、主体的に学習に臨むためには、日々の授業で「わかった・できた」という成功体験を積み重ねていく必要がある。そして、自ら学び、考え、友達とともに高め合っていく経験を通じて、自己の変容を実感し、より主体的な姿の実現へとつなげていきたい。そこで、今年度の研究主題は、子供が達成感のある授業づくりを通して、「自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成」とした。

《別紙１》

３．研究組織と進め方



①研究推進委員会の推進のもとに，研究全体会の研修内容を充実させ、研究を進める。
　研究全体会は、研究推進委員が進行・記録をする。
②各部会では，指導案の作成・検討，日常の授業においての取り組みについての情報交換等を行う。
③研究全体会では、教材研究・指導案検討・模擬授業・授業整理会・講話等を行い、主題に迫る。
④講師を招聘し、研修を深める。
⑤校外研修で学んだことについて報告会を行い、全職員で共有し、実践に生かす。
⑥ＰＤＣＡサイクルを基本とし、研究授業等で見えてきた課題を日々の実践に生かしていく。

４．研究の内容

（１）子供が「わかった・できた」達成感のある授業づくりに向けて

①課題の焦点化

・年間計画、指導事項配列等をもとに、前後の学年の指導事項を確認し、指導事項を正しく捉え、つけたい力を明確にする。児童がどのような姿になれば、力がついたと判断できるのかというＢ規準を明確に持つ。そして、そのねらいを達成するために有効で、児童の実態に合った言語活動の開発と選定を行う。日常生活と関連付け、学ぶ必要性や目的・相手意識を明確にし、児童の意欲や主体的な学びが持続するような工夫をする。
・目標を達成した児童の具体的な姿を明らかにし、評価基準や評価場面、評価方法といった見取りの視点・方法を探っていく。

②学習形態の工夫

・対話的に学ぶ場を意図的・計画的に位置付け、学習課題や学習過程が見通せる授業づくりをする。児童が目的意識を持ち、話し合いの必要性を感じる場面で効果的な学習形態を工夫していく。そのときには、話し合いの観点を持たせ、自分と他者の意見や考え方を比較したり、自分では気づくことが難しい気付きを得たりしながら、考えを広げたり深めたりできるような場面や学習形態を設定する。学習形態を工夫することで、目標達成に向かう児童の学びのプロセスの中で「何を」「何から」見取るかを意識した授業づくりをしていく。

③学びの自覚化

・児童自身が学びの広がりや深まりを自覚化し、学ぶことの意味を感じ、次の学習意欲につながるように、授業や単元の終わりには、つけたい力に沿った振り返りの視点を提示する。また、集団で学んだことを再度自分自身で振り返ることで、自分の考えを再構築し、深い学びへとつなげていく。

（２）学びを支える基盤づくり

①自ら学び、考える力を育む基礎・基本

・語彙力を養うために、朝読書の時間を有効に活用する。図書館司書と協力して、各学年に「おすすめの本」を設定したり、月に１回読み聞かせをしたりして、幅広い本に触れる環境を整える。また、学習への意欲を高めるために、単元の始めに図書館司書によるブックトークも取り入れる。
・授業の中で学習用語を意識的に使ったり、国語科教科書付録「言葉のたから箱」を活用したりして、表現を広げていくよう意図的にしかけ、語彙を増やしていく。
・国語辞典や類語辞典を使って新たな言葉を獲得したり、ことばに触れる掲示環境を整え視覚化したりすることで語彙を増やしていく。
・対話を通して自分の考えを広げ深めていくために対話活動の充実を図る。教材や友達との対話を通じて自分の考えを言語化する。対話トレーニングや新聞ワークシートの活用を通じて、学びの土台となる対話の力を高めていく。

《別紙１》

②授業を支える土台

・生徒指導の３機能を生かした学級・授業づくりに努める。友だちの発言を最後まで傾聴し、友だちの言葉を途中で遮らず、自分の考えと比べより深く考える習慣を身に付けさせる。

・授業を支える学習規律を徹底する。「聴く・話す」めざす姿を全学年で共有して取り組む。「チャイムでスタート」「学習道具の準備」を基本とし、全学年共通で取り組む。

５．研究計画

月	日	研究会等	内容
４	１３	研究全体会	研究概要・研究計画について 「たちばなっ子の聴き方」の共有
５	２０	研究全体会	研究授業①の指導案検討 研究授業①の模擬授業
７	１	要請訪問	**研究授業①**　（高学年部会）
７	１３	部会	１学期の振り返り 児童・職員アンケート①
８	２６	研究全体会	計画訪問授業の教材研究・指導案検討 研究授業②の指導案検討
９	２８	研究全体会	研究授業②の模擬授業 授業交流期間 ９、１０月
１０	２７	研究全体会	
１１	２９	計画訪問	**研究授業②**　（低学年部会）
１２	２３	部会	２学期の振り返り 児童・職員アンケート②
１	１８	研究全体会	研究のまとめ
３	１	研究全体会	来年度の研究について

研究授業について

・要請訪問・計画訪問で各部会１本ずつ行う。

・計画訪問で行う各教科の中で、研究の３つの柱を意識した授業づくりをする。

研究の柱を意識した日々の実践

・「課題の焦点化」、「学習形態の工夫」、「学びの自覚化」が日々の授業の中で展開されていくように教材研究する。

研究のまとめについて

・日々の実践の中で行ってきた３つの柱についての成果と課題をまとめていく。
国語科、他教科の２領域での実践が見られるまとめとする。

《別紙１》

R4　研究構想図

研 究 主 題

自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成
～子供が「わかった・できた」達成感のある授業づくりを通して～

研究を通してめざす児童の姿

・課題意識を持ち、主体的に、粘り強く解決しようとする子

・対話を通して自分の考えを広げ深める子

子供が「わかった・できた」達成感のある授業づくり

課題の焦点化

- 指導事項を正しく捉え、つけたい力を明確にした、ねらい達成のために有効な単元計画、言語活動の設定

学習形態の工夫

- 自分の考えを持たせ、児童の実態や目的に応じた場（自分との対話、交流、全体で共有→深める･広げる）の工夫

学びの自覚化

- ねらい達成ができたかを視点としたふり返りによる学びの自覚化とその場の設定
- ふり返りによる自分の考えの再構築

目的に応じた適切な場面での効果的な GIGA タブレットの活用

自ら学び、考える力を育む基礎・基本

語彙を増やす
・朝読書、読み聞かせ、ブックトーク
・言葉のたから箱
・国語辞典や類語辞典の活用
・ことばに触れる掲示環境づくり

対話の充実（自分と、友達と、教材と）
・対話を通じて考えを言語化
・対話トレーニングの活用
・新聞ワークシートの活用

授業を支える土台

温かい人間関係づくり･集団づくり
・生徒指導の３機能を生かした学級・授業づくり

学習規律の徹底
・チャイムでスタート、学習道具の準備
・「聴く・話す」めざす姿の共有と共通実践